

藤枝市史だより

創刊号 平成11年8月10日発行

編集・発行 藤枝市郷土博物館

管理課市史編さん係

〒426-0004 藤枝市若王子500（蓮華寺池公園内）

TEL 0544（645）1100

平口猛志さんの記憶をもとに
75年ぶりに再現された大久保の
「盆の川原飯」

平成十年度にスタートしました市史編さん事業は、市民や関係者の皆様のご理解・ご協力をいただき、順調に進んでおります。

事業実施にあたりましては、二つの大きな目標をかげ、日々の調査等を行なっております。一つは、田中藩・藤枝宿・茶の産業等を中心に藤枝の個性を浮かび上がらせることです。二つ目は、講演会や学習会を開催し、市民が参加する学習の場を設け、生涯学習の中に位置づけることです。昨年度に行なった主な調査は、考古担当では志太九景寺古墳を、近世・近現代担当では谷稲葉の伊久美家と大洲村文書を、民俗担当では藤枝大祭について行ないました。また、

藤枝の豊かな歴史と

文化遺産を後世に



藤枝市史編さん委員長
藤枝市長 八木 金 平

収集した資料の中で重要なもの約二万点のマイクロフィルム撮影や、市史叢書『稲葉村誌』の復刻版刊行等も行ないました。

本年度は、『市史研究』と『藤枝市史史料目録』を刊行する予定です。また、引き続き、講演会や学習会も開催します。市民の皆様にご参加していただきたいと考えております。

最後に、市史編さん事業が二十一世紀に向けての新たな文化・教育事業として発展することを願い、市民の皆様のご理解・ご協力をお願い申し上げ、あいさつとさせていただきます。



瀬戸川の上流や大久保川の上流には、〈川原飯〉と呼ぶ盆の行事が昭和二、三年頃まで行われていました。八月十六日の朝、精霊を川に送った後、川原に石を積んでカマドを作り小豆飯を炊きます。それを近所の人達みんなで食べるだけのことでしたが、妙に懐かしく楽しい行事でしたと大久保の平口猛志さん（明治四十四年生まれ）は記憶されています。

藁科川の上流清沢では、〈川原飯〉は子供たちの行事で、年長の者が仕切って小豆と米を集め、川原で煮炊きました。この川原飯を食べると、川に溺れないと言われていました。伊豆の大仁では、ボンガマと呼び、十四歳の女子が頭になってこの行事を仕切りました。このボンガマを終えて、初めて十四歳の女子は、腰巻きをつけたのでした。このことから、川原飯やボンガマと呼ぶ行事が、単なるママゴト遊びではなく、子供が大人になって行く通過儀礼の一つだったことがうかがえます。大久保の平口さんの記憶では、大人も子供も一緒になって川原飯をやったと言われ、大久保ではすでに子供の行事ではなかったことがわかります。そうすると、大人の都合で止んでしまったのかもしれない。

（写真と文

民俗担当調査委員 八木 洋行

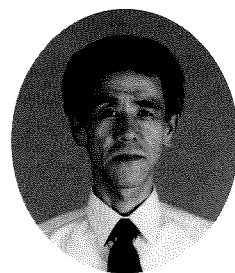
あたらしい藤枝市史が

目ざすもの

市史編さん委員

市史編さん専門委員長

湯之上 隆



中世担当

静岡大学人文学部教授

静岡大学在職中、最後の大きな仕事になりそうです。委員長としての責任を自覚しつつ、皆さんに地域の歴史を学ぶ楽しさとむずかしさをわかっていただけるよう、気合いを込めて編さんに取り組みたいと思います。

あたらしい藤枝市史の編さんが始まりました。

現在の藤枝市を構成している地域を暮らしの場としてきた、さまざまな先人たちの生活の歴史や地域の成り立ち、文化遺産を正確に知るための学問的な根拠について、とりわけ環境、生産と消費のあり方、政治と社会組織や交通、文化や宗教・習俗といったことなどに注目しながら、詳しく明らかにする、ということがあたらしい市史の一番大きな課題だろうと思います。あたらしい市史には、地域の豊かな歴史と文化遺産を活かし、住民が誇りをもてるあらたな街づくりの指針となることが求められています。

藤枝市は静岡県内はもちろん、全国的にみてもたいへん特色のある市です。たとえば、若王子古墳群に代表される古墳の分布をみますと、県内ではもっとも濃密な地域のひとつです。それ以前の弥生時代の遺跡もかなりの分布を示していますし、何よりもこの志

太平洋はたいへん豊かな実りを与えてくれる場でありました。古代では国史跡に指定されている志太郡衙跡（御子ヶ谷遺跡）があります。もうひとつ、益頭郡衙跡と考えられている郡遺跡があり、ひとつの市のなかに古代の行政区画であった郡の遺跡が現在ふたつも確認されているという、これもまた全国的に珍しいことです。

鎌倉時代以後になりますと、東海道が現在の市域を東西にのびていましたが、市域には藤枝宿と前島宿という二つの宿がありました。今川氏の時代に入りますと、花倉一带には今川氏関係の遺跡がかなり多く残っていますが、これらはこれまで本格的な発掘調査が行なわれていません。今後、今川氏関係の寺である長慶寺を含む今川氏関係遺跡に光をあてる必要があるだろうと思います。戦国時代になりますと、今川氏・武田氏・徳川氏が深く関わった田中城があります。さらに江戸時代の田中藩には有名な学者が多数輩出し

ましたし、庄屋や宿場の有力町人を中心にたくさんの方々がいました。ところが、田中藩については広く知られていないため、関係の文化財、学者や門人の活動などをまとめて刊行する予定です。

市史は委員をはじめとする編さんに関わるあらゆる人々の努力や情熱、心構え、またそれに報いようとする行政当局や市民の皆さんのご理解とご支援によって、よい成果が得られると考えています。この点については、今後十三年という長い事業ですので、関係の方々にくれぐれもご理解をいただきたいと思います。

わたくしは、苦難に満ちた編さんの過程で得られたさまざまな情報を広報普及活動―「市史だより」「市史研究」などの広報誌や講演会・学習会、普及版の刊行など―によって、市民の皆さんにお知らせしたいと思っています。今は、生涯学習・生涯教育の時代といわれておりますが、市史編さんについ

て言えば、市史の成果を藤枝市の地域の特質と個性を尊重した生涯学習のなかに位置づけることだと考えます。委員だけで編さんを進めるのではなく、市民のなかに広く歴史を愛好する人たち、あるいは歴史に学ぼうとする人々のサークルを育て、そして、それらを増やしていく。さらに願わくは、そういう方々のなかから資料の調査や収集、あるいは筆耕、執筆にあたるような方々が出てこれると、市史のあり方としてはまことに望ましいことだと思います。

最後に、広い視野で地域を探求し、あたらしい藤枝市史をきつかけにして、日本から藤枝を見つめるのではなく、逆に藤枝から日本や東海地方・駿河を見つめること、ということを考えてみるこれがからますます大切になるでしょう。あたらしい藤枝市史が順調に進捗しますように、市民の皆さん方のご協力とご支援を切にお願いいたします。

顧問・専門委員の紹介

湯之上専門委員長をはじめ、計6名の専門委員で専門委員会を構成し、市史編さん資料の調査から執筆・編集まで行ないます。

顧問
原 秀三郎
ひでさぶろう

千葉大学文学部教授



藤枝は駿河山西の中核として古来地政上重要な位置を占めてきました。また、前回の市史（昭和45年）以後、とくに考古学・古代史での知見の増大には目を見はるものがあります。新市史はおそらく面目を一新するものになると大いに期待しています。

考古担当
篠原 和大
しのはら かずひろ

静岡大学人文学部助教授



大学では主に弥生時代の集団や社会について考えています。藤枝には重要な文化財がたくさんあります。市史では、その内容と意義をわかりやすく伝えられたらと思っています。31歳、妻と航太郎（0歳）の三人暮らしです。

古代担当・専門副委員長
山中 敏史
やまなかとしじ

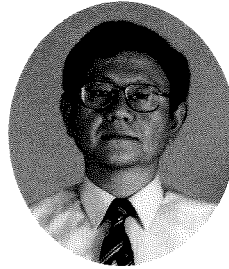
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長兼発掘調査研究室長



出身地の焼津を離れて二八年が過ぎ、古代の都奈良の人となりでしたが、離れた地から郷土の歴史を改めて見直す機会を与えられて喜んでます。喪失した故郷への郷愁をバネにしつつ、古代の藤枝の姿を追求していきます。

近世担当
関根 省治
せきね しょうじ

富士市立吉原商業高校教諭



いままで主として東駿河・伊豆をフィールドに、江戸時代初期の天領支配を研究してきました。藤枝市史では西駿河の天領支配や田中藩の藩政について勉強したいと思っています。

近現代担当
北原 勤
きたはら つとむ

県立掛川工業高校教諭



近現代担当は六人のチームです。アツと息をのむような資料との出会いを信じてドキドキしながら資料調査を進めています。市民の皆様との共同作業で面白い市史づくりをめざしたいと思っています。

民俗担当
野本 寛一
のもと かんいち

近畿大学文芸学部教授



生活様式や価値観の変化で伝統的な民俗が急速に喪失しつつあります。そうした中で編さんされる藤枝市史民俗編は、このところ、やや自信喪失気味の現代人に、先人達のメッセージとして多大な示唆を与えてくれることになるでしょう。

市史編さんに関わって



ふじえた女性史研究会
代表
谷澤 祥子
たにざわ さちこ

今回、市史編さん事業の末端に私達の会が席を連ねさせて頂くことができ、大変嬉しく思っております。この会は、毎月第二水曜日に高洲公民館で活動しております。活動中は、話し合いの埒場と化します。そうした中、少しずつ「藤枝市周辺に住まわれた先人達の女性の歴史を一冊の本にまとめたたい！」という思いが強まって参りました。折しも市史編さんの部屋に行く機会が与えられ、良い方向が見え出した感じを抱いております。「良かったね！」の会員の言葉に「今後、継続して編さんに関わらせてもらいたい。」「委員会にあてにされ責任を持ってやらせて頂きたい。」「歴史の中の女性像を浮き彫りにしたい。」など、ボランティア活動である位置づけをしっかり踏まえ、私達の会としての関わりの立場と思いを記させて頂きました。

市史叢書『稲葉村誌』を復刻

大正二年編さんの「稲葉村誌」を活字化（原本は手書き）して出版しました。現在では忘れ去られてしまったような歴史資料が豊富に収められています。B5版、本文一九ページ、頒布価格は千円で郷土博物館で販売しています。

市史学習会

とき／8月21日 午後2時～4時
ところ／稲葉公民館 2階 和室
テーマ／「明治初期の農業―明治八年谷稲葉村物産取調書を読む―」
講師／北原 勤氏（市史編さん専門委員・県立掛川工業高校教諭）

市史講演会

とき／10月16日 午後2時～4時
ところ／生涯学習センター ホール
テーマ／「日本民俗の古層を探る―藤枝その年中行事から―」
講師／野本 寛一氏（市史編さん専門委員・近畿大学文芸学部教授）

資料を探しています!!

市史編さん事務局では、市史編さんのための資料を探しています。皆様の自宅に江戸時代の古文書、明治から昭和にかけての書類、日記、写真など、当時の暮らしを知るための資料が眠っていないませんか。資料をお持ちの方は、ぜひお気軽に地区調査協力員または市史編さん事務局へご連絡ください。

10年度事業の紹介

近世・近現代

谷稲葉の伊久美家は代々孫右衛門を襲名して名主役を勤め、石高一二〇石余（田畑一〇町歩余）の地主でした。同家は江戸時代の文書だけでも二〇〇〇点余、明治以降のものや書籍を合わせると五〇〇〇点近い資料を保存しています。慶長九年（一六〇四）の検地帳や、同十七年（一六一二）の年貢割付状など、江戸前期の文書も数多くあります。また、名刹心岳寺を経済面からも支えていたようです。明治になると、小学校が設立されますが、多額の基金を寄付して、村の教育に貢献したり、茶や養蚕など産業の推進に積極的であったことを示す史料が目立ちました。

大洲村の文書は、近世と近現代を合わせると、約一五〇〇点あります。近世は土瑞のものが多く、寛文三年（一六六三）以後の年貢割付状がほとんど揃っています。天保年間（一八三〇～四四）、弥左衛門新田で砂糖の栽培・製造が盛んであったことを示す文書もありました。近現代では旧役場文書が多く保存され、これらの史料によって、地方政治の実態が明らかにされると思います。平成十年度は、およそ九四〇〇点の古文書を調査しました。



養蚕ポスター（谷稲葉伊久美家所蔵）

資料の写真撮影▶



考古

市内の遺跡を把握する為に遺跡台帳を作成し、博物館収蔵の遺物などについて再確認を行なっています。

夏休みを利用して、志太にある九景寺古墳の調査を行いました。この古墳は江戸時代から「九景寺の岩屋」と呼ばれ、昭和五年発行の『静岡県史』にも紹介されています。墳丘の測量と試掘調査を行ない、墳丘が近代に削られた痕跡と、石室のひろがりを確認することができました。

九景寺古墳調査風景



民俗

平成十三年度の民俗編の刊行を目指し、本調査として市内各地で、人生儀礼、年中行事、民間信仰、社会組織などについての聞き取り調査及び写真撮影を行ないました。

特に平成十年度は三年に一度の藤枝大祭（鮑波神社大祭）の年にあたったため、大祭参加各地区の皆様の協力のもと、その準備段階から大祭当日に至るまでの間、集中的に調査を行いました。

藤枝大祭

